

平成29年度 第2回旧御所水道ポンプ室の保存・活用に係る懇談会議事録

日 時 平成29年12月25日（月） 午前10時～正午

場 所 京都市上下水道局本庁舎 大会議室

出席者（五十音順，敬称略）

1 委員

石田 潤一郎	京都工芸繊維大学教授
奥 美里	京都市行財政局・文化市民局参事
窪田 裕幸	京都商工会議所産業振興部長
中嶋 節子	京都大学大学院教授
宗田 好史	京都府立大学副学長
山添 洋司	京都市公営企業管理者上下水道局長
山田 有希生	京阪ホールディングス株式会社経営統括室事業推進担当部長

2 京都市

京都市公営企業管理者上下水道局長，水道部長，総務部経営政策担当部長
事務局（水道部管理課・施設課，総務部経営企画課）

次 第

1 開 会

- (1) 出席者確認
- (2) 進行の確認，会議の公開について

2 議題

- (1) ポンプ室の文化財的価値について
- (2) ポンプ室の立地状況を踏まえた活用の方向性について

3 今後の予定

- (1) 今後の進め方及びスケジュールについて
- (2) 第3回懇談会について

4 閉 会

内 容

1 開 会

(1) 出席者確認

事 務 局：出席者の確認

(2) 進行の確認，会議の公開について

宗田委員長： 事務局より議事及び資料の確認をお願いする。

事 務 局： 議事及び資料の確認

宗田委員長： 進行の確認，公開の確認について，進行の確認はすでに行っていた通りである。公開は原則公開となっている。非公開情報を扱う予定はないので，原則通り公開とさせていただくがよろしいか。

(異議なし)

宗田委員長： 懇談会中の撮影は議事に入る前までということによろしいか。議事録の確認は名簿順で奥委員と中嶋委員をお願いする。事務局が作成後，委員の皆様の内容を確認いただき，お二人にはその後御署名いただく。後日事務局より連絡があるのでよろしく願います。

事務局より資料の説明をお願いする。

2 議題

(1) ポンプ室の文化財的価値について

(2) ポンプ室の立地状況を踏まえた活用の方向性について

事 務 局： 資料の説明（資料4～6）

宗田委員長： まずポンプ室の文化的価値から議論いただきたい。

資料36ページに、「旧御所水道ポンプ室の外観は，ネオ・ルネッサンス様式の状況が良く残っている」とあるが，保存状態についてはルネッサンス様式に加え，作者の総意工夫を全て含めて良く残っているので，文化財的価値が高いということだと思う。次の「窓や建具も傷んではいるものの，残っている状況は良い」との記載も，もう少し表現を工夫した方が良い。オーセンティシティなものがどれだけ残っていて尊重されるかということと，インテグリティといってポンプ室としての機能をどれだけ備えているかということの2つの観点がある。何が本物かという点は文化財の価値に強く関わることで，形体，材料，意味，機能などによって，全く違う。その点も丁寧に書いていただいた方が分かりやすい。文化財の中のどのランクに指定すべきかについて論じるならば，どのくらいのタイムスケジュールで指定するつもりかとい

った計画について、決まっていれば説明してほしい。そのために必要な要素を示したうえで、議論する方が良いのではないか。

石田委員： 片山東熊の設計作品の資料があり、参考になる。この一覧にはないが、桃山御稜は宮内省内匠寮の作品で、東熊が設計指導を行ったと考えられているので、入れておいていただければ良い。

価値づけの表現については、もう少しブラッシュアップが要るが、おおまかにはこういったところだと思う。

中嶋委員： 前回の懇談会から色々な資料が加わっており、ポンプ室の価値が明らかになってきたかと思う。36ページに建物の特徴が記載されており、文化財的評価がされていることは良い。また、地理的環境があまり良くない中で、あれほど建物の部材のオリジナルが残っていることは高く評価される。ただ、なぜ残さなければならないかということは、もう少し突き詰めて示せたら良い。ネオ・ルネッサンス様式であり、片山東熊の作品であり、かつ御所水道にまつわるものだからというだけでなく、京都において、あるいは日本の産業史・技術史において、どのような意味を持つかということが、前提として大事な点である。

宗田委員長： 私は1970年代に建築を勉強していたので、近代建築に関する研究・プロジェクトとして「近代建築総覧」を作ったときに、自分の足で日本中の近代建築を周って、それらのリストをまとめた。その当時に、辰野金吾・片山東熊の名前を多く耳にした。片山東熊の作品は室のようなもので、京都において近代に宮内省関わった建築として、片山東熊の作品がここに残っているというのは、さすが宮内省の御所水道だと思うし、非常に重要な意味を持つ。片山東熊について熱く語っていたことを思い出される。今、中嶋委員の話を伺い、我々がこういったことを教えていけない限り、今の学生にはその価値が全くわからないと思った。平成10年代に生まれた学生が増えてくると、昭和が遠くなる。どうやって受け継ぐかは大きな課題である。昭和50年前後に戦前の天皇を中心とした事に関して語ったときと、平成が終わろうとしている時期に近代皇室について語ることは全然違う。これをどう語るかについてももう少し議論があっても良い。

奥委員： 先日、石田先生・中嶋先生と一緒に現地調査に行かせていただいた。35ページは非常によく建物を見て、分析していると思う。片山東熊の名前を聞くと、京都国立博物館や赤坂離宮などを思い出し、横綱級の設計者だと思う。その設計者の作品が琵琶湖疏水沿いに、あのような佇まいで人知れず残っていることは感動的だった。小さくはあるが美しいという印象である。

中嶋委員がおっしゃったように、建物の価値づけをするときに、なぜ残さなければならぬのか、どんな意味があるかということは、丁寧に書くことが大事だと思う。岡崎地域の活性化ビジョンを作成したときにも、岡崎地域の歴史・成り立ちを語るうえで、疏水は大きな話題であり課題だった。京都にとっては東京遷都による人口減少・京都の衰退に対して、京都市民の総力でもって造られた琵琶湖疏水の意味は大きい。その琵琶湖疏水の中で御所水道の位置づけがあり、そしてこのポンプ室がある。建物の保存というだけでなく、そのことがポンプ室に来る方に語り伝えられることが重要であると思う。

京都市に在籍しているときにも、それだけの価値あるものだと感じた。岡崎の文化的景観の中でも重要な構成要素となっており、単に景観として位置づけるだけでなく、人々のくらしや営みとともにつくられてきたという意味づけをさせていただいた。

宗田委員長： ポンプ室の文化財的価値を保存していくうえで、京都市で何か予算化しているものはあるか。

事務局： 具体的な額としては予算化していない。維持管理・補修に必要なものは都度執行している。疏水全体で同様にしている。

山添委員： この懇談会で意見をいただき、文化財的な価値を確認し、このあとで議論すると思われる方向性について必要な経費は確保していく考えである。

宗田委員長： 今、行政的には、文化財の価値について一定の共通認識がある。市民にそれをどう示し、どのように文化財への理解を深めていくかということが論点になる。岡崎全体での価値、琵琶湖疏水の文化財としての価値、文化的景観としての価値、建築としてのポンプ室の価値が重層的に積み重なっている。明治の京都をどう語るかということが問われている。

その意味では、来年で明治維新150年になり、様々な記念行事を京都市・京都府が主体となって行う予定でもある。歴彩館を中心に講演会等を行う予定である。私もそこで話す予定がある。150年というのは大きな節目である。昭和20年までが70数年、戦後が73年になり、ちょうど、終戦が折り返し地点となる。戦前の近代日本に対する反省があると同時に、近代の努力のうえに近代国家が成立したという自信もあった。産業遺産は戦争遺産でもあり、プラスとマイナスの面がある。市民にどのような利益と負担があったかについて、

語られるべきである。

文化財については、文化財保存の歴史について語られるようになった。例えばウィーンやパリでアール・ヌーヴォーなどの近代建築をどのように保存しているか、また、イタリアで古代ローマ等などの時代まで遡って価値をどのように位置づけるかといった議論がされるのは興味深いところである。ここでも、京都の長い歴史の中で、明治の京都をどう語るかということを含めて、市民にどのように見られ愛されるか、文化の問題として考えておいた方が良い。

例えばウィーンでは、リングシュトラッセが作られた時代やオットー・ワグナーが活躍した時代の建築は、それ以前のバロックの建築とは違う愛らしいものとして捉えられた。ヨハン・シュトラウスが活躍した時代もあった華やかなウィーンというイメージとは違う。

明治の東京遷都の後、衰退した京都で岡崎が蘇った時代があつて、それが京都の自信に繋がったかもしれない。岡崎の文化的景観は、そういった中で華やかさを持って登場した文脈があるかもしれない。明治維新150年の年に、京都市民が京都の近代を華やかに思い出すきっかけとなる土地や建物があったらよいと思う。琵琶湖疏水が京都の産業の基盤をつくったと習ってきたが、それに近代京都の文化の華やぎのイメージが加わるかもしれない。そういったことが言えると楽しい。

山田副委員長： 中嶋委員の発言にあつた「なぜ残すのか」という点について考えていた。観光客の立場で意見を言うと、外観がやはり率直に素晴らしいと思った。中之島の中央公会堂や市役所などの明治期の建物と同じように素晴らしい。ただ、水道施設の中にあることで、中に立ち入ることを前提としておらず、ほとんどの人が見る機会がなかった。今後は、文化財としての価値を認めて、保存・利活用することが望ましい。

京都はあまり爆撃の被害にあつておらず、寺社仏閣・木造建築・町家が多数残っている。岡崎エリアについて考えたとき、江戸時代の木造建築の中に、南禅寺水路閣・旧御所水道ポンプ室・蹴上発電所などの明治のレンガ造の建築が残っているところに、単に1つの建築としてだけでなく、トータルでの価値を認めることができると思う。これまでの歴史を踏まえ、エリア全対を見て価値を評価すべきかと思う。

窪田委員： 資料はあらかじめ拝見して、改めて、旧御所水道ポンプ室は素晴らしいものだと思った。

文化財の対象になり得る建物ということだが、活用を考えるときにはデメリットがないのか。外観の保存が主だと思うが、登録・指定することで今後触ってはいけないといった制約が発生するならば、教えていただきたい。

また、36ページに、「空間を機能的に使うためにポンプ設備自体は3基のうち1基は残すことが望ましい」とあるが、ポンプ設備は「当時こういうふうに使った」という機能を示す為に残せばよく、設備自体にはそれほどの価値はないということか。

石田委員：

文化財の活用については、文化庁も文化財保護法の改正を含めて考えている。事前にどこを保存し、どこを活用していくか、なぜ活用するか、どのように改修しなければならないか等をあらかじめきちんと示し、その中で保存していくなら、かなり融通もきく。要相談ということになるのではないか。文化財には釘も打てないという俗説があるが、そんなことはない。

ポンプそのものは、かなり新しいものである。

機械そのものが古いわけではない。ただ、下から水を吸い上げて水路に運ぶポンプの機能があって初めて意味が伝わると思う。「せめて1つは残すべき」というのは、その観点からのシンボリックな意味である。

中嶋委員： ポンプそのものの価値は技術士などに見てもらった方がよい。ただし、ポンプの年代は、建物の年代からかなり遅れた、1970年前後のものである。

建物の外観そのものは確かに素晴らしい。ただ、元々の機能はポンプ室の覆屋だったという歴史がある。その歴史そのものが、あの建築の本質的な意味である。ポンプ室だったという記憶を完全に失わせて外側だけを残すということは、建物にとって良いことではないと思う。物語や機能があって初めてその建物の意味が伝わり残る。石田委員・奥委員と一緒に見たときも、近代遺産の構えとして、システムをなんらかの形で見せる形の活用が良いのではないかと思った。稼働するという意味ではなく、跡が残る方が良いのではないか。ただし、それが絶対的に文化財登録の要件になるわけではない。委員会の意見を踏まえ、上下水道局・文化財保護課などで相談しつつ考える必要がある。

窪田委員： 活用のことを考えると、限られた床面積の中にポンプが占める面積が多い。

3基のうち1基は残すということは、ある意味では非常に良い提案だと思うのだが、確認させていただきたかった。

文化財保護課： 文化財にも色々な種類がある。重要文化財などは基本的には凍結保存を目指すものだが、石田委員がおっしゃったように、最近は活用とのバランスを図ることが言われている。全く改修できないというものではないと思われる。また、登録文化財等のより規制の緩やかなものもある。価値をどのように評価するか

検討し、その価値に見合う文化財制度を利用するということになると思う。

宗田委員長： 先週月曜日に東京で、京都創生に関して『日本の京都』研究会が開催された。そこで、二条城での東アジア文化都市の開催について、市立芸大の建島先生からの報告と平竹政策監の解説があったが、大変素晴らしく、さすが京都と思った。

建島先生が、「二条城では庭師の皆さんが毎日きちんと働いており、彼らの協力なくしてはできなかった。とんでもないことをすると怒られるかと思ったが、実に関心を持って、こういうことをするために自分たちはこの庭を百何十年も守ってきたんだということを語ってくれた。アートの祭典は文化財でやるに限る」と話をされて、その説明がとても良かった。

旧御所水道の活用については、文化財の保存にとっても、活用にとっても、全国的に誇り得る、建築的な素晴らしい解決ができると思っている。

産業遺産の活用は日本では少し遅れている感じがする。ローマでは、ブルーノ・ゼミの息子のルーカ・ゼミという建築家がおおり、ポンプ場を美術館に改修しようというプロジェクトに取り組んだ。もっと広い空間にポンプが並び、そこに現代彫刻系のアート作品が置かれていた。19・20世紀の造形は、エンジニアリングと彫刻等の美術が隣り合わせにあるのだと感じられて面白かった。文化財としての価値というより、造形で組み立てるのも面白い。

建物の中だけに飲食店に入れようとするのが狭いと感じるかもしれないが、ポンプ室周辺の整備も行うので、オープンカフェなどを含めて考えれば、ポンプを背中にして、カウンターのようなものを作ってバルでもできれば面白い。ローマのその美術館では実際にそういった使い方をしているので、思いつきで発言しているが、色々と流動的に考えられると良い。

奥委員： 先程美術館の話題が出たので、京都市美術館の再整備についてご紹介する。

京都市美術館は、昭和初期の非常に大きな建築で、大理石など当時のままの材料が結構残っている。現在再整備中であるが、再整備後には登録文化財への登録を目指して進めている。ただし、機能的には非常に古いので、空調等は最新に変えたいと思っている。また、地下に増築し、地下の表にサンクンガーデンのようなものが出る予定である。古い建築に新しく増築を行い、ミュージアムショップやカフェを入れようとしており、近代建築の文化財としての要素や価値は石田先生などにご意見をいただきつつ大切に残しながら、そこに新しい価値を付け加えようとしている。

石田委員： どこまでの制約があるか、どの程度の補助金が発生するかという疑問・懸念のご意見があったが、文化庁サイドとの調整をすれば、片山作品の保存という

ことでもあるので必ずや関心を持ってもらえらると思う。視野を狭くするより、そういった手順を考えて踏んでいただければよい。

先だって調査報告書を拝見したが、宮内省業務の資料についても相当発掘していただいている。当初の設計図もきれいに残っていると初めて知った。京都市と宮内省のやりとりや、宮内省の考えなど、歴史的背景等もよくわかることが確認できた。中嶋委員のおっしゃったような歴史的評価ということを考えるうえでも非常に重要な手掛かりを得たと思う。それらも含めて幅広く価値づけを行っていただけると良い。

中嶋委員： 御所に流れこんでいる御所水道から水を引くポンプがちゃんと動くかどうかテストして、紫宸殿の上に水が撒かれているところの写真も残っている。御所を守るために、宮内省の建築家が作ったもので、実際に送水していたというように、京都全体のストーリーの中に位置づけてもらおうと、市民としては非常にわかりやすい。

宗田委員長： さきほど明治維新から150年と言ったが、加えて平成が代替わりする意味でも重要な時期である。先週、世界遺産登録推薦が文化財審議会が決まったが、いつまでも陵墓を宮内庁の所管としていたらいけないという判断である。我々下々の者の家でも代替わりのときには墓を整理するのと同じように、皇室財産を国民の財産にするという議論がある（もちろん、民有化するという意味ではないが）。それを考えてもらうきっかけとして、退位の年に合わせて世界遺産になるようなスケジュールで動いている。

京都市内にも皇室財産に関わる陵墓・離宮等がある。修学院離宮周辺の水田は、宮内庁がお願いして小作に出していたが、周辺の農家数が減少しているので、京大農学部のお世話になっているようである。そういったことを含め、近代天皇制とそれに関わる資産（御所・離宮・陵墓等の皇室財産、昭和14年に下賜されているが元々皇室財産だった二条城等）を今後どう継承するべきかについて議論される必要がある。近代をどう振り返るかという大きな議論の中にある問題である。

京都が持っているこの旧御所水道ポンプ室は、非常にシンボリックなものである。市民に愛される文化財の保存の仕方をつくっておくことが必要である。

石田委員： そもそも京都御所は壮大な空き家とも言える。御苑自体も元々公家屋敷が全部なくなった空気を整備し、御所の保存・活用を図るために整備されて今の姿になっている。戦時中に炎上したため渡り廊下を全て壊し、まだ復旧されていない箇所もある。一方で、京都御所は京都の歴史における一大舞台だった。ポンプ室は、その一翼を担う御所水道に因らずも関連している。建築の外観の美

しさ、機能に加えての象徴的な意味の広がり・価値の深さをぜひ踏まえてほしい。

さきほどウィーンの話が出たが、近代建築史の神様のような存在のオットー・ワグナーの作品であるウィーン中央郵便局を観に行ったら、まだ郵便局として使っていた。ホールの中にはパーテーションがあって、写真が絵にならなかった。逆に言うと、普通に使いこなし、また使い倒していた。ポンプ室についても、尊重しながら、どんどんこき使うというような姿勢は重要だと思う。

宗田委員長： 内観・建具・ポンプについて何かお気づきの点があれば、御意見をいただきたい。

山添委員： 今日技術的議論は不要だと思うが、ポンプを残すとなると、それだけの広さが必要となることはもちろん、技術や経費の問題がある。ポンプ室としての歴史的価値を保存する意味で、ポンプの保存が必要だということは理解する。しかし、一方で、現在は地下に水が入っているため建物は安定しているが、耐震性が非常に低いので、床を上手に活用するという観点からどうすればいいのか。経費の点からも議論が必要だと思う。

宗田委員長： 山添委員としては当然の意見だと思う。

奥委員： 文化財的価値とは違う観点で気になったことをお伝えする。報告書を見せていただいた。藻採場という水を入れる地下層が2層あり、水が入っていることで安定している状態なのだと思うが、藻採場が片方に偏っていることが気になる。反対側の基礎がどうなっているかが報告書の資料ではわからなかった。片方の面が地下2層になっており、もう片側は琵琶湖疏水の横に位置するので、盛り土が何かに基礎を作っているのかと思う。残す・残さないに関わらず、非常に耐震性に問題がある。地上のことだけでなく、地下の問題ももう少し調査して考えないと難しい。

中嶋委員： 耐震技術は日進月歩であり、いろんな方法があるだろうが、個人的な思いとしては、ポンプ室だったシステムを何らかの形で見せるように残すことが良いと思う。可能性については検討が必要だが、できればコンクリートで埋めたりせず、可逆的な方法を採用できると良い。複数のパターンを提示いただき、その中で判断するしかないと考えている。使い方を決めて、それに応じた補強の在り方を検討することもありうる。補強が先、活用が後ではなく、その両方を行ったり来たりしつつ判断することが必要である。観光拠点の1つとして考えているが、琵琶湖疏水記念館に来た人を旧御所水道ポンプ室まで連れてきて、

そこでポンプ施設として紹介できる何かを残す必要がある。ただの飲食店や船溜まりになってしまうのではもったいない。

宗田委員長： 既に「(2) ポンプ室の立地状況を踏まえた活用の方向について」に関するご意見をいただいたと思う。

一度整理すると、文化財的価値については、横綱級の建築であることがはっきり示された。ポンプ室は京都の近代史にとって極めて重要なものであり、京都の近代の天皇家との関わりを研究する上でも重要なヒントとなるものである。それらを踏まえると活用を前提とした保存をすることも、拙速な議論は慎み、慎重になるべきである。どのような修復・保存を行うのが良いか、少し時間をかけて丁寧に検討したほうが良さそうである。明治維新150年の折に、次の150年を捉えてポンプ室がどうあるべきかを考え、我々が検討する活用が次の150年にずっと残るような形になるよう考えるべきだと思う。それだけの価値がある文化財だということが確認できた。修復・保存についても、応急修理は別にして、急いでやれば良いというものではないので、150年の計で考えていただきたい。

では、活用の方向性についてご意見があるか。

山田副委員長： 琵琶湖疏水通船について、お客様は関心を持っていただき、問合せが殺到している状態で、有り難い悲鳴があがっている。実働を増やしていこうといったことも考えたいが、ひとまず初年度は年間82日で行っていく。82日という数は、年間の4分の1に満たない。また、12月～3月中旬は停水期で疏水路の清掃があるため、その時期は通船できないという現実を踏まえることが重要である。また、試行実験でも、桜と紅葉の季節である春・秋で行い、真夏は暑いので避けている。台風やゲリラ豪雨のリスクもある。これまでは安定した運行ができており、雨での運休は一度もない。(琵琶湖は非常に風が強いので、ミシガンなどの船は強風による運休が多いが。)とはいえ、天候は踏まえる必要がある。

何を言いたいかというと、利活用について、高価格帯のレストラン等が案として出ているが、通船目的の方には立ち寄っていただけない時期がある。稼働率について考えると、それ以外の観光客に、年間を通してどのように利用してもらうかについて考える必要がある。

また、蹴上駅からの道路からのアプローチで自動車は鋭角になっているため入りづらく、観光バスで立ち寄れるような道幅ではない。サインの整備をすればインクラインからの誘導はできるが、バリアフリーや自動車動線が弱い。

更に、現在、仮設トイレは男性用1箇所、女性用1箇所用意しており、通船の利用客は1隻当たり12名、2隻でも24名なので、順番に利用していただ

いている。しかし、バルなどの飲食施設を設ける場合には、トイレも拡充する必要がある。課題は色々ある。

JRのトワイライトエクスプレス瑞風では、料理・調理にかなりこだわっている。そのような狭い厨房で高価な飲食店を行うにしても、サービスを提供するための厨房の面積がどこまで取れるかなど、どこかの段階では、料理の専門家の意見等も聞いて考えるべきである。

宗田委員長： 1日に上り下り合わせて9便で12名が乗る。フル稼働して1日108名が乗ることになるのか。

事務局： 上りは8名なので、100名弱である。

宗田委員長： 年間100名くらいが使うスペースとしては限られたもので良いが、もし飲食スペースを入れるならば、それだけでは商売にならないので、そのほかの客を集める必要がある。

フィレンツェのミケランジェロ広場の一帯が綺麗になっている。3年前に世界遺産に登録されたパラッツォ・ピッティのボーボリ庭園にあるベルヴェデーレは、ミケランジェロ広場からだど2kmくらいは歩かないといけない丘の上にあるが、とても素晴らしい場所である。17世紀のビッラ・別荘建築を使っていると思われる飲食店やカフェがある。車でも行けるのだろうが、ゆったりフィレンツェの町を眺めながら歩いていく場所である。また、ウィーンではウィナーワルツをいつも演奏している歴史的建造物で飲食を楽しむことができる場所がある。旧御所水道ポンプ室は、蹴上からずっとインクラインを歩いて、少し奥まった素晴らしい場所で、まさにそういう場所になる。夏なら冷えたワインやビールを一杯飲んで汗をかいて下りてくる、冬は襟を立てて歩いていくとホットココアでも飲んで帰ってくるというような、わざわざ歩いて行って飲食を楽しんでくる場所になれると良い。そうなればそれだけで頑張っ歩いて歩ける。岡崎は今そういうお客さんが増え、新しい店ができたりしている。一連の流れを食の観点からも作れるとよい。

中嶋委員： 来年度は限られた敷地しかないが、敷地周辺が整備されるということなので、建物の中から楽しむだけでなく、外から疏水を眺めながら楽しむという方向もある。敷地一体で考えるのが現実的かと思う。外観が魅力的という話もあったので、建物を見ながらカフェを楽しむのも悪くない。建物の中にプラスアルファで敷地にどれだけの面積がとれるか検討すると、建物の中と役割分担しながら、見え方・楽しみ方を色々広げて考えられると思う。

窪田委員： 中だけでの展開は1つの案としては良いが、41ページを見ると、商業空間や集客を図る空間とすることはなかなか難しいと思う。周辺環境の整備について10年かけて展開していく構想のようなので、中期的に、面的にどのような機能を持たすかを検討した方が良い。短期的には暫定利用のような意味で待合機能が考えられると思うが、ポンプ室だけでなく全体で活用した方が良いという印象である。

宗田委員長： ポンプ室周辺の整備については、周辺環境が今後10年間に建物が撤去されて見通しが良くなり、オープンスペースが広がる。

岡崎の整備がかなり進んでおり、市立美術館の再整備もある。岡崎との関係で、この蹴上疏水公園をどう再整備するか、東山自然緑地まで繋いで岡崎から東山自然緑地一帯をどう歩いてもらうかが課題である。桜・紅葉の季節は一番人が集まり、疏水・インクラインまで歩いてもらえる。その上に少し人に滞留してもらえる場所ができれば、山科まで行くと、御陵周辺もなかなか良いところで、地下鉄の駅も目の前にある。そこからさらに疏水沿いを歩いても、十分公共交通で帰って来ることができる。全体の整備をすれば、ここがすごく生きるかもしれない。ここで、500万人くらいお客さんを収容できれば、京都観光にもすごく貢献する。地下鉄東西線の需要が一気に伸びるだろう。

奥委員： 南禅寺・蹴上から旧御所水道ポンプ室に至る道は非常に良いが、それが知られていない。南禅寺水路閣にあれば人が来るので、ポンプ室の方がもう少し開ければ、良い観光コースにできるのではないかな。いかに情報発信して良い観光コースとできるかが大きな課題である。岡崎地域の活性化に取り組んだときに、多くの琵琶湖疏水が好きな人に会った。琵琶湖疏水記念館で疏水について勉強し、御所水道に行き、雰囲気の良い山科の方にも向かうように取り組んでいただけると良い。

建物は文化財として外を眺めるだけでなく、やはり中を見て、活用して意味を知ってもらうということがすごく重要だと思う。規模が小さいので、レストラン等に使うことは難しいかもしれないが、歴史がわかる展示やカフェ等として活用して、多くの人を訪れ、色々なことを感じる場所になるとよい。

山田副委員長： 蹴上から旧御所水道ポンプ室のエリア全体について考えると、ここは第1疏水と第2疏水が合流する場所で、鉄道会社で言えばレールの分岐点のような非常に重要な場所である。よく疏水通船に乗ってくれた方に岡崎エリアを案内して水路閣にも行く。一般的には下から見上げて写真を取って終わりということが多いが、上にあがって水が流れているところを見てもらい、「そこで驚いてはいけない。普通は水は山から下っていくので、京都では、北から大阪に向かっ

て流れるはずだが、疏水は北に向かって水が昇っている。」という話をすると、すごく感動される。人工的に作られた運河であるからこそ出来ることを、お酒を飲みながら、あるいは食事しながら語り伝えることができる場にしてもらおうことが、文化財の価値ではないかと思う。

宗田委員長： おっしゃる通りだと思う。京都市内では小学校で疏水について習うが、全てについて語られるわけではない。分水などは良い例である。京大の裏を流れ、高野の方へ行く。高野には昔は水を利用する鐘紡の工場があった。そこからサイフォンの原理を使った地下水路になる。そのあたりに建っているイズミヤが、「カナート」という縁のある名前を名乗っていることなどは、実にすばらしいと思う。さらに、松ヶ崎浄水場に流れていき、その界わいを潤している。疏水がないうちは、松ヶ崎で田んぼなどできなかった。その後、下鴨・鴨川の下をくぐり、堀川に水を供給し、二条城に戻ってきている。また、伏見の方に行くと鴨川運河がある。語るべきところは色々ある。京都の近代を水が繋いでおり、それがこのジャンクションで始まっている。ここに第2の琵琶湖疏水記念館のようなものを作れば、人がもっと集まるかもしれない。今の琵琶湖疏水記念館は上下水道局の所管で、技術的なことに焦点が当たっている。発電機があるからということもあるが、測量や建設に関連した展示で、田邊朔朗を讃えるストーリーになっている。その後京都がどう変わっていったかというストーリーを語れると良い。

山添委員： 琵琶湖疏水記念館では、色々企画展のようなものもやっているが、前回の委員会でも説明があったように、開館30年を迎えるので、ソフトも含めた改修を考えていきたい。旧御所水道ポンプ室との関係をどこまで考えられるかということはあるが、やっていきたい。

石田委員： この辺りは散策していても、安価でちょっと立ち寄って休める場所が無い。賑わい機能としてフルサービス型のもので客単価を上げる可能性も検討されているが、ちょっとしたウッドデッキのようなものに座って、200～300円程度の安価でコーヒーでも飲めるようにすれば、インシャルコストが下がるので、それも有りかと思う。我々はどうしても建物を見せたい・見たいということを考えるが、ポンプ室を傍らに疏水の流れをやトンネルを眺めるのも良い。

山田副委員長： 色々な考え方があり。当然ランニングコストもかかるので、そのようなスモールスタートもあり得ると思う。コンビニの100円コーヒーなども非常においしい。そういったものを含め、公民の色々なものを運んでくるということは、1つのやりがいだと思う。

レストランを営業することを考えると、冬場は日が短くなり、17時くらいから真っ暗である。足元がとても悪いので、夕方以降は、車や鉄道で現地に直行になることが考えられる。マーケティングを行い、口コミでここがすごいという話題になり、レストランとして必ず行こうと思えるくらいの価値が出せれば、お金がかかっても人が殺到する。それは、文化財的価値とは別の話だと思う。一方、春・秋の行楽シーズンやゴールデンウィークは、すごい数の人が来るので、ちょっとした休憩所やお手洗いを設けるのは行政としては重要だろうと思う。どちらの機能も作るべきかどうかは議論すべきことだと思う。

宗田委員長： 京都は観光客が急速に増えているので、春から夏にかけて無許可で露店を出して商売する外国人等がチラホラ目につく。インバウンドが増えるにつれ、世界各国の観光地同様に、急速に増えており、四条通や河原町通ではすぐ駆逐されるが、周辺部はいたちごっこ状態である。哲学の道などでは、旅行者と露天商の区別がつきづらく、アクセサリーなどを売っていたりする。ゲリラ的なものではない、バンでやってきて飲み物・食べ物を売るような露店商を観光地において、どう取り扱うかは課題である。また、急速に緑地が人の集まる場所になっている。国交省の都市計画部局の中にある公園緑地を所管する部署では、河川沿いの占有許可の法律を整備している。広島では、飲食店を誘導して、おしゃれなカフェを持ってきて、人が集まるスポットとしている。

旧御所水道ポンプ室では、一時的に民間企業に出店いただくなど、段階的な方法があるのではないかと。市の所有地・施設をどのように民間に開放するかということ、観光政策との関係の中で考えるべき時期に来ている。この場所は岡崎公園に準ずる1等地なので、上手く活用すれば、嵯峨野から鳥居本までの散策路のように、蹴上駅あるいは三条駅から岡崎エリアを歩いて旧御所水道ポンプ室まで来て、蹴上からまた電車で帰るといった東山散策の大きな道が開ける。

山添委員： 40ページにあるように、10年計画とは言え、不要な建物は除却し、ポンプ室は人が入れるようにしていきたい。建物の中も利用したいが、一方で、現在は通路のようにになっている建物の正面が、将来は大きな空間になるので、周辺もカフェにするとことも場合によってはあり得ると思う。もしかすると、そちらの方が人気になるかもしれない。トイレと簡単な厨房も必要だとすると、どう使うかということが問題となり、ここだけでやっていくということは少し難しいかもしれない。山田委員がおっしゃったように時間・季節の問題もある。

宗田委員長： 中に入りたいという要望もあったが、建物は外から見ても楽しい。外の空間を大事に使ったらよい。それではそろそろ時間なので、今後の進め方とスケジュールについて説明をお願いします。

3 今後の予定

(1) 今後の進め方及びスケジュールについて

(2) 第3回懇談会について

次回の懇談会は平成30年1月～2月頃に行うこととし、後日事務局より日程の調整を行う。また、今回は、今回の懇談会での意見を整理し、より具体化した方向性を委員に確認いただくこととした。

4 閉 会

宗田委員長： 本日の進行は以上である。円滑な議事の進行にご協力いただきありがとうございました。

以 上